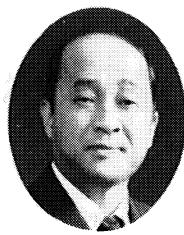


子・親・教師としての実感



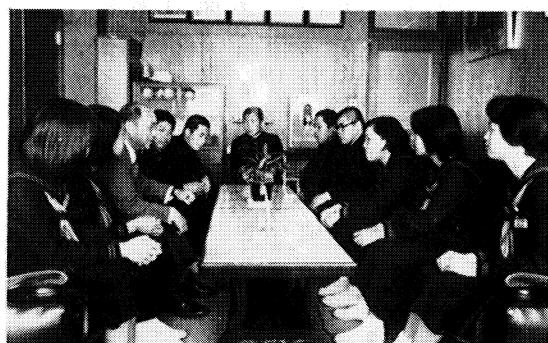
廣田徳一

私ども教師仲間でも、自分の子をもつて始めて、一人前の教師になつたといわれ、人の子を導く教育觀も変わるものである。まして、わが子を入学させ職に就かせ、更に結婚させてみると、なおのことである。それは、わが子をとおして、心の底から実感として、わかれらのことは、私ごとで忍縮ではあるが、子として親として、また教師としての私の得た実感をのべてみたいと思う。

私は、太平洋戦争出征中に両親を亡くしてしまった心の痛手を、終生忘れることができないのであるが、今考えると、当時の父親とのふれ合いは、どちらかといふと疎であつたと思う。でも、父は人一ぱいの子煩惱で、きめ細

かな配慮をしてくれていた父の愛情は、いろいろな形でくみとることができた。ただ、成人になつて一度でもよいから父と酒杯をかわし、心ゆくまで親子の語り合いをしてみたかったと、今でも思うことがある。

私は、過ぎしある年の三月、娘の大卒業の日、年度末で多忙のため、上京して卒業式に参列し祝つてやることができなかつた。もつとも、本人は来なくともよいといつてはいたのだが、私は父としての気持ちを、どんな形であらわすかと考えた。そこで、私は下宿の本人あてに、妻にもないしよで、「卒業おめでとう。本当によかつたね」と、祝電をうつことにした。来なくともよいとがんばついていた強気の娘も、



「がんばりの心」について生徒と話し合う

かたたわ」と、もらしていた。私は、どんなささいなことでもよいから、子供の心をとらえてゆさぶる「きめ手」を持ちたいものであると思つてゐる。これが、平凡な子に対する私の平凡な父親觀である。

私は、昨年四月、過去に教諭・教頭としてお世話になつた現任教校での三度目の勤務となり、全校の生徒にはとても実現できなかつたが、三年生から始めて二年生までの子らと、昼休みの時を、席を同じくして自己紹介をし合い抱負などについて語り合う機会をもつことができた。最後にする私の自己紹介は、きまつてこういうくりかえしであつた。

『本校とは御縁があつて、私の長い教員生活の約半分を、三度にわたつて勤めることになりました。しかし、このことは何も自慢にはなりません。ただ、私は、心ひそかに誇りに思つてゐることが、一つだけあるのです。それは、自身のことなので、だれにもいいたくはないのですが、可愛いみなさんには、うち明けましょう。それは、一つの道を、同じ職場で、永く勤めるということは、たいへん難しいということです。私は、それをさせていただきました。私は、この道での新たな自信を、五十を過ぎたこの年になつて得ることができました。率直につけて、私は、自分の持つてゐる能力だけは惜しみなく出しつくし、困難を乗り越えて、がんばつてきましたつもりです。それで、この「がんばりの心」だけはみなさんは負けないつもりです。私は、この点でみなさんのお手本になります。私の姿をみたら、声を聞いたら、さあがんばらなければ。と、心を鞭打つて欲しいのです。教育の道は、近くにあつて遠い道であり、朝夕元気にかわす子らとのあいさつが楽しい現在である。

(いわき市立平第一中学校長)